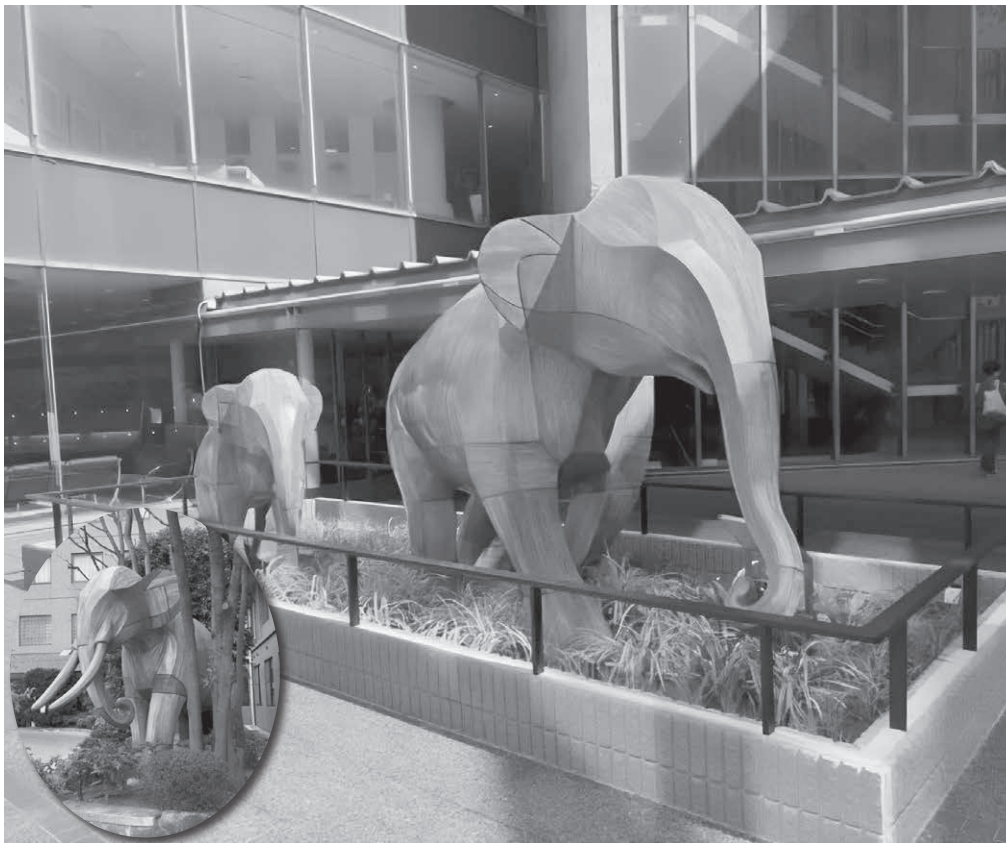


万博の記憶と交流を未来へつなぐ

東大阪に息づく万博レガシーの広がり



大阪・関西万博を契機に、本市ではその成果を残すべく地域発の万博レガシー（遺産）が生まれている。

（医宝持会 池田病院とその関連施設「総合健康づくりセンターHolly E.I.W.A.」では、万博会場で置かれていたゾウの親子3頭のモニュメントが登場。同院の池田理事長が万博を訪れた際に、モニュメントとパビリオンのテーマ「大きな幸福のため、いのちの力を与える」に感銘を受け、タイ側に譲渡を打診。しかし、本国に持ち帰ることが決定していたため、モニュメントを制作したタイの会社に依頼して自費で複製した。ゾウはタイ文化において繁栄と長寿の象徴とされており、入居者をはじめ人々の健康を願う新たな地域のシンボルとなっている。

また、石切参道商店街には「ナウル共和国石切参道パビリオン」がオープンし、国際交流も進んでいる。ナウル共和国は人口およそ1万2千人の南太平洋

洋の島国で、万博開催中におけるSNSでの情報発信を契機に本市職員と交流が生まれ、今回のレガシー創出に繋がったという。パビリオンオープン時にはセレモニーが開催され、同国の国家遺産省と石切参道商店街振興組合との「日本ナウル文化交流都市協定」締結式も行われた。パビリオンでは万博会場で展示された島の形を模したゆるキャラ「ナウルくん」のグッズが展示・販売されている。これらのレガシーは万博の価値を一過性に終わらせず、万博の記憶と交流をつなぐものとして、その役割が期待されている。

